

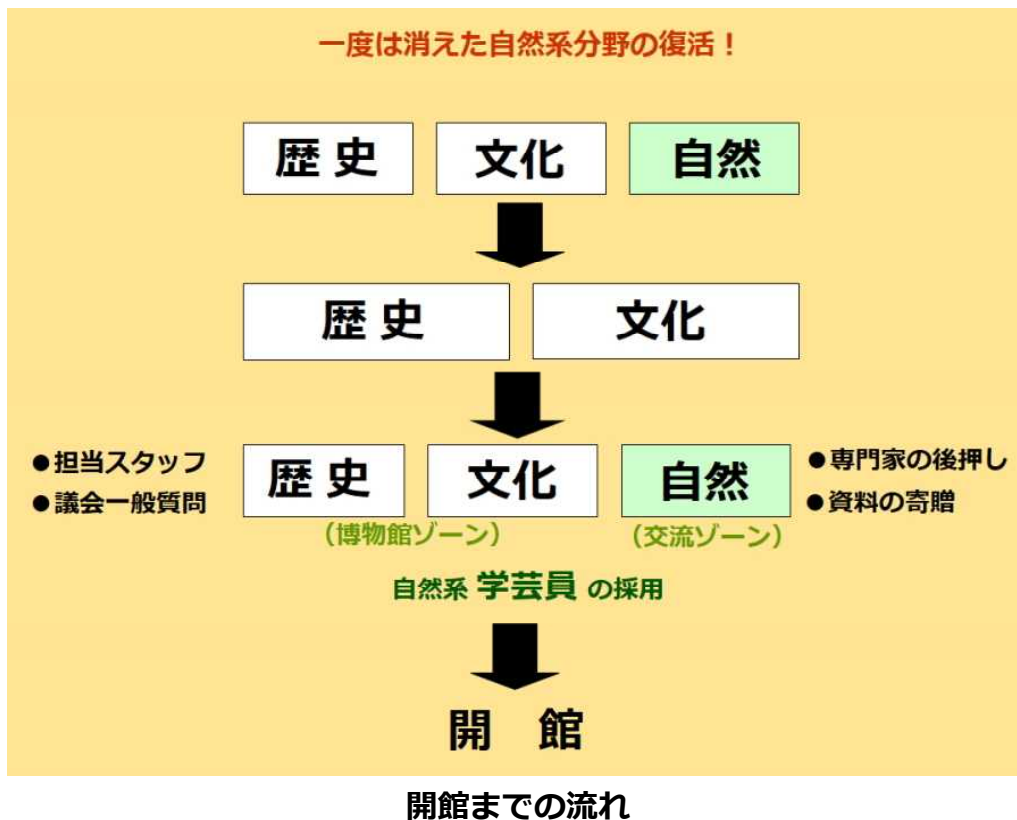
対馬博物館への期待

～ 自然系分野の運営に関する一提言 ～

2022年4月、待ちに待った対馬博物館が開館しました。ここに至るまで紆余曲折がありましたし、市民の期待にどれ程応えられたものになったのか分かりませんが、少なくとも私個人にとっては「対馬に博物館ができた！」という子どもの頃からの夢が現実化したのですからワクワク感は半端ではありません。

計画段階から機会ある毎に直接的あるいは間接的に関わってきた一人として、途中で気持ちが萎えそうになったことがあったのも事実です。今から10年前の2012年、対馬市が博物館建設計画の中で示した基本理念についてパブリックコメントを募集しました。その時、私が市に提出したパブコメ（受理されたのはわずか1件でした）に託した思いは今も変わることがありません。

博物館は対馬の文化的施設の中核として役割が求められます。ここでは、当時のパブコメを基本としながら若干の修正を加えることで、博物館の特に自然史分野のよりよい運営に資することを願いながらの一提言とします。



提言 I 自然史分野の内容の充実を

従来、厳原町にあった県立歴史民俗資料館をはじめとして各6町に歴史・文化資料館的な施設がありましたが、ただ見て回るだけの資料展示室といった感じでした。また、展示内容も歴史や文化に関わるもので占められ、動植物や昆虫類などの生物系あるいは岩石や化石といった地史的なもの等、いわゆる自然史的な展示物は全くといっていいほど見ることはできませんでした。ただ唯一、今はなき厳原町の郷土館には貴重なキタタ

キの剥製やただ1箱の昆虫標本が展示されていましたが…。

対馬の歴史や文化の重要性については論を待ちませんが、それと同じように動植物や昆虫類などの生物の多様性もまた、対馬の特異性を示す貴重なものです。

生物地理学的にみた対馬の生物相の特異性・多様性は、

- 日本では対馬でしか見られない大陸系の生物が数多く生息している。
- 世界で対馬だけにしか生息しない対馬固有の生物がいる。
- 島という閉じられた環境の中で亜種まで分化したと思われる多くの生物が見られる。
- 他地域と同じ種でも対馬独自の遺伝子を有する生物がいる。
- 対馬暖流の影響と思われる亜熱帯性の生物や遺存種が見られる。
- 日本では本州の中央高地や北海道などの寒冷な気候を好む生物が対馬の平地で見られる。

などです。

このような特異性・多様性により、近世より国内外から多くの研究者が対馬に関心を寄せるとともに来島し、調査研究を行ってきました。現在も毎年多くの研究者や愛好家が来島していますが、対馬の自然や生物相を俯瞰するための施設はもちろんのこと事前の問合せに対応する窓口さえ十分ではないのが現状でした。

生物地理学的に見た対馬の生物相の特異性・多様性

対馬の自然や生物相を俯瞰する施設としての博物館

**自然史的な面への認識を新たにし
積極的に生かしていこうとする発想に転換を**

博物館の意義

このように生物地理学的に重要な対馬において、これまで自然史博物館のような施設がなかったことが不思議でなりません。従って対馬博物館の開館を契機に、対馬

の自然史的な面への認識を新たにし、積極的に生かしていこうとする発想に転換しなければなりません。その意味でも博物館開館はまさに絶好の機会が訪れたといえるでしょう。

さて開館した今、施設面での実際はどうなったのでしょうか？

歴史・文化・自然の3本柱のはずでしたがさすがに同等というわけにはいかず、常設施設のほぼ全てを歴史・文化が占め、自然史分野は何とか交流ゾーンの一部、教室一室分ほどの2階「講座室」が与えられました。展示専用の部屋でもなく、これからの運営に制限がかかるという残念な結果でしたが、全くのゼロでなかったこと、何より無料スペースであったことは幸いでした。このような厳しい施設環境において、如何に魅力的な運営をしていくのかが問われることとなります。

以下に具体的な方策を述べてみたいと思います。

自然史関係の展示内容について

(1)自然に関する総合的展示

ア. 昆虫標本 →対馬の昆虫の特異性・多様性を示す展示を

- ・限られた展示スペースなので、常時展示標本は対馬産に限定してほしい。外国産の大型美麗昆虫展示は企画展など特別な場合でよい。
- ・単に標本を羅列するのではなく、対馬の昆虫相の特異性が分かる展示コーナーを工夫する。

- 「大陸系昆虫のコーナー」「対馬特産種（特産亜種）のコーナー」は必須

標本だけでなく、生態写真パネルや解説を併用して分かりやすく堅苦しくない展示に心がける。

- 対馬亜種と本土亜種の対比 対馬個体群と他産地の対比

対馬亜種や独特な対馬個体群については、本土亜種や他産地との違いを示す展示を行う。

(ヒラタクワガタ、オオフトオビドロバチ、コマルハナバチ、ツマキチョウ、トノサマバタ、ニホンミツバチ等)

- 「外来生物のコーナー」

(ツマアカスズメバチ、ヌマガエルなど)

- ・蝶や蛾、トンボ、大型甲虫類だけでなく、一般的にはマイナーな分野の昆虫も幅広く展示してほしい。
- ・標本や写真パネルなど静的な展示物だけでなく、大型モニターで対馬の昆虫の動画コンテンツを流す。
- ・大型モニターで昆虫採集用具（捕虫網、三角缶、毒ビン、ビーティングネット、吸虫管など）の紹介したり標本作製の手順（展翅、展足）などを流す。
- ・可能ならば生き虫の展示も

各種クワガタ、ゲンゴロウ等の水生昆虫、カマキリやツシマフトギスなどの直翅類

開館記念の特別展として「故相浦氏の対馬の昆虫標本展」が行われました。氏は長年にわたって対馬の昆虫を蒐集され、その標本は量のみならず優れた標本作成技術と相まって非常に貴重なものでした。散逸寸前のところご遺族の御理解、市議会議員の働きかけなどとともに、特に東京大学総合研究博物館の矢後勝也氏のご尽力により博物館に寄贈されたものです。今後様々な企画運営の中核をなすものと思われます。特にチョウ類、トンボ類、クワガタムシ類が充実しています。



相浦コレクション展

イ. 両生類・爬虫類

- ・写真パネルや映像コンテンツだけでなく、次の種については生体展示をしてほしい。水物は制限されていると聞すが、何とか工夫改善できないものか。

ツシマサンショウウオ、ツシマスベトカゲ、アムールカナヘビ、アカマダラなど

ウ. 植物標本 →写真・映像コンテンツを中心に

- ・植物も基本的に「大陸系種」「特産種」を中心に据えた展示が望ましい。
- ・植物関係は写真パネルと映像コンテンツが中心になるが、特に季節の流れに沿った映像コンテンツは必須と思われる。
- ・植物の「現存植生図」のパネルもほしい。

エ. 鉱物標本 →対馬の地史を

- ・対馬の特異な生物相は対馬の地理学的位置と地史にあるとあってよい。大陸～日本と陸続きになった時代、対馬海峡の成立、朝鮮海峡の成立などその流れが分かる簡易的でもいいので「対馬の地史パネル」がほしい。

・「対馬の地質及び地質構造概略図」はどうだろう。

オ. 漂流・漂着物標本

・特にアイデアは持ち合わせていない。県生物学会の中西さんに相談？

カ. 剥製

・キタタキ（現存）＋ツシマヤマネコ、ツシマテンなど展示スペースの兼ね合いからもごく少数か。

(2)地域の自然史研究の取組の紹介

・企画展の内容としては面白いと思うが常設展示としては必要ないと思う。

(3)保全活動

・ツシマウラボシシジミの保全活動など、余分なスペースがあれば写真パネルで簡単に紹介する程度でよい。

提言Ⅱ 運営について

1 体験的学びの場としての博物館に

最近の博物館運営には「展示物の充実」「持続的で細やかな更新性の確保」だけでなく、生涯学習社会における「体験型学びの場」、つまり市民やその他外部に対して学習の機会を提供するという大きな役割が期待されています。博物館は、今や展示だけで来館者を呼び込む時代ではありません。



昆虫採集・標本作製ワークショップ（学芸員 谷尾嵩氏提供）

「対馬の魅力を知らない、対馬の素晴らしさに気づいていないのは地元対馬の人たちだ。」という声を聞きます。対馬はどんな島？と聞かれて、「何もなければ自然が豊かな島」という答えでとどまっているようです。市民が対馬について学ぶ場が



昆虫採集・標本作製ワークショップ（学芸員 谷尾嵩氏提供）

必要です。特に、次の世代を担う子どもたちが、学びを通して郷土対馬に自信と誇りを持つことができるとしたらこんな素晴らしいことはありません。

写真は7月下旬に実施された「昆虫採集・標本作製入門ワークショップ」のようすです。真夏の虫の少ない時期でしたが、子どもたちが目を輝かせて活動している姿が見られました。

(1)「つしまはくぶつかん子ども生きものクラブ」

- ・小学生～高校生までの子どもたちを対象に、自然や生き物について組織的に学ぶ機会を提供する。組織の運営や活動内容については十分に検討を重ねた上で実施する。

(2)図鑑などの書籍の充実を

- ・子どもたちが採集したり撮影したりした生き物の同定など、調べ学習ができる環境を整える。
- ・長崎県には「長崎県生物学会」「長崎昆虫研究会」などの団体あり、定期的に会誌を刊行している。この2誌は揃えたい。

(3)ショップの充実を

- ・昆虫標本作製用具、花や虫や鳥などの絵はがきセット、やまねグッズなどの販売

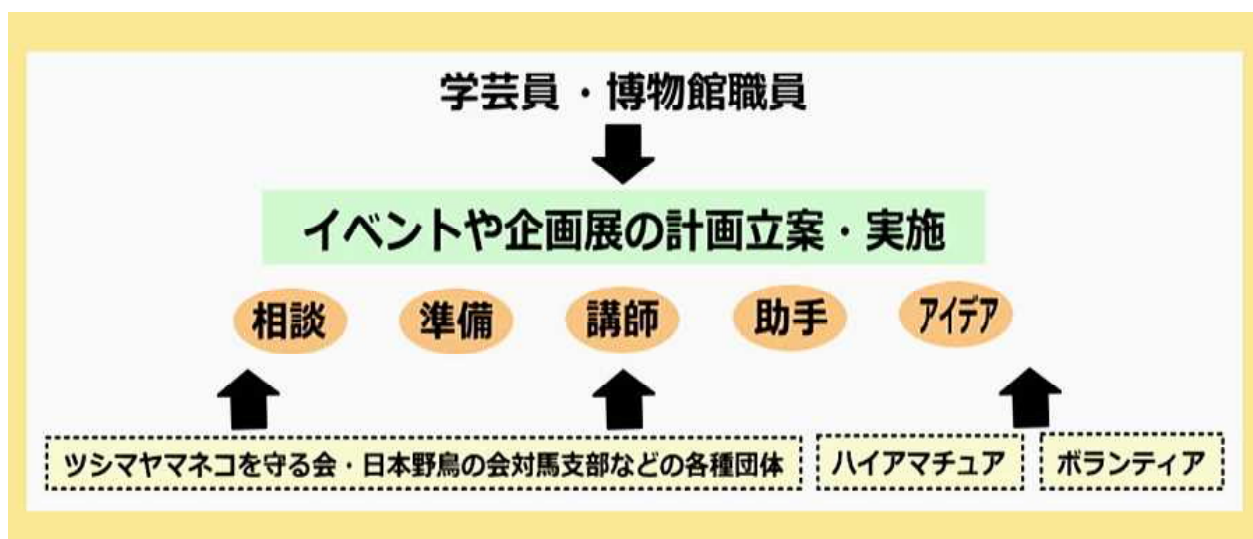
2 専門性+企画力のある学芸員をサポートする地域人材の活用を

どこの博物館においても、独自の企画立案に基づいたイベント等を積極的に開催し、来館者を能動的に呼び込む事業を展開しています。したがって、最近の博物館

学芸員はただ単にその分野の専門性だけでなく、魅力的な事業をトータルコーディネートする資質が求められています。

非常に有能なスーパー学芸員もいないことはありませんが、一人の学芸員にそこまで期待するのは酷というものです。学芸員をサポートする非常勤の嘱託職員であるとか、例えば、企画内容によっては島内在住のその分野に詳しい地域人材（市民）を活用することなどが必要となるでしょう。その際、公的施設ということで何でもボランティアで協力をお願いすればよいという考えは改める必要があるでしょう。

施設（ハード）を生かすも殺すも、携わる人（ソフト）です。



博物館を支える民間の力

提言Ⅲ 収蔵資料の充実を

1 幅広い資料の収集を

自然史関係の資料は標本だけではありません。昆虫類はそのほとんどを標本の形で資料化できますが、哺乳類や両生・爬虫類、鳥類、植物などは写真や動画での記録媒体が重要な資料となります。例えば、亡くなられた國分英俊先生が遺された対馬の植物の写真は、今では撮れないような種も多く含まれている貴重な資料です。

写真や動画のコンテンツはHDDやSSDに保存できますので、収蔵も場所をとることはありません。

2 収集した資料のデータベース化

これはどこの博物館でも行われています。標本や画像をデータベース化することによって利用価値が格段に高まります。まずは相浦コレクションのデータベース化を図らなければなりません。大変な作業ですがボランティアの活用などで日常の業務として取り組んでほしいものです。

3 島内の自然系団体との連携の要として

「ツシマヤマネコを守る会」「日本野鳥の会对馬支部」「対馬の自然と文化を守る会」「対馬の自然と生き物の会」などの団体との連携を図ることから一歩進めて、

各団体をまとめる役割を果たしてほしいと思います。

提言Ⅳ 広報と啓発

1 ホームページやSNSの活用

HPが既に立ち上がっていますが更新が命です。博物館職員の誰もがHPを更新できるスキルを身につけてほしいと思います。(運営管理責任者は館長)

単なるイベント告知にとどまらない内容の充実に期待します。

2 定期的な「博物館だより」の発行

紙媒体で、対馬野生生物保護センターの季刊誌のようなかた苦しくない内容を望みます。

自然史分野は東京大学総合研究博物館の矢後勝也先生などのご協力によって土壇場で復活しました。最後になります。改めて謝意を表します。内外の多くのナチュラリストの希望が叶ったことを嬉しく思います。また、新たに任用された自然史担当の学芸員の方にはご苦労が多いと思いますが、他の博物館と連携を取りながら新鮮な発想で運営にあたっていただくようお願いいたします。

幸いなことに自然史系の展示等は無料で利用できる交流ゾーンで行われます。特に次世代を担う多くの子どもたちには遊び感覚で来館し、好きな時に好きなだけ対馬の自然や生き物にふれる時間を過ごしてほしいものです。

(2023年12月記)



〒817-0021 長崎県対馬市厳原町今屋敷668-2

TEL : 0920-53-5100 FAX : 0920-53-5111

開館時間 9:30 - 17:00 (入館は16:30まで)

休館 毎週木曜日 (木曜日が祝日の場合はその翌平日)